終の棲家

圓地文子

終の棲家

著者の了解により検印廃止

昭和三十七年十月二十日　第一刷發行
三五〇圓

著者　圓地文子
東京都文京區音羽町三ノ一九

發行者　野間省一
東京都板橋區志村町一ノ一

印刷所　東洋印刷株式會社
（藤澤製本）
東京都文京區音羽町三ノ一九

發行所　株式會社　講談社
振替　東京　三九三〇
電話大塚(941)大代表三一一一

落丁本亂丁本はおとりかへいたします。

© 圓地文子　一九六二

目次

屋根の重み　五
男の荷　女の荷　四六
過去が歩いて來る　七九
男と巣　一〇五
女の日記　一三六
深夜の散歩　一六三
傾斜とブレーキ　一七七
片づかぬもの　一九九
ぬけて行つた一人　二一一

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.c

終の棲家

屋根の重み

客間のベルが鳴つてゐる。

稽古場に使ふ十疊の日本間で、縁側の陽當りに生花用の劍山や鋏を出して、手入れしてゐた美須は布巾の手をとめて、舌うちした。

「チョッ、又……聞えないんだわ。ほんたうにしやうのないつんぼだ……」

とひとりごとにぶつぶつ云ひながら、腰をのすやうにして立上る樣子は若づくりの顏が嘘のやうに老けて明らかに老女の物腰である。ベルは女中部屋に通じてゐるのだが、女中のやす子は耳が遠いので隣の臺所にでもゐると、聞えないことが始終である。その爲、生け花の稽古日には美須の懇意な未亡人が家政婦代りに來てくれるのだが、今日はその日でないのに、珍らしく主人の廉平のところに客が來てゐるのだつた。

客が來ると云つても實は不思議ではない。この家の門柱には豐中法律事務所と立派に表札が出てゐるのだから……元來廉平は職制改革で役所を辭めたあと、ある開發會社の監査役といふ割のいい職をあてがはれたのだが一期の任期がすむと、株主總會の決議であつさり退職させら

れた。會社としては官廳への義理を一應果した後で、社交性にかけた廉平を體よく掃き出したわけだが、役所へ入つたのが晩くて恩給もついてゐない廉平とすれば無職でぶらぶらしてゐるわけにも行かない。それで辯護士の資格を持つてゐるのを生かして、自宅で開業することになつたのだが、知人のやつてゐる會社で二三顧問の名を與へてくれて年に二度包み金の謝禮をよこすぐらゐで、事件を持ちこんで來る依頼者はまことに尠いのである。はじめは法律學生を書生に置いてみたが、採算がとれないので半年と經たない中にやめた。

現在、片耳聾のやす子一人で大した不便もないことが豐中廉平の辯護士としての營業狀態を雄辯に語つてゐるわけである。

美須は大聲を上げて、やす子を呼び立てるのが面倒になつて、腰衣のやうな蠟染めの前垂れをはづすと、緣側傳ひに玄關脇の洋間の方へ歩いて行つた。大正時代らしい石の多い庭の手水鉢の横に、一本山茶花があつて、うす紅のそりかへつた花びらをくすんだ葉の間に飾つてゐるのが昔風の小さく仕切つたガラス戸越しに見えた。陽當りにゐると暖いのに、陽の透らない向きの板の間は足袋の足裏が冷えて、ああもう毛足袋を履く季節になつたと美須は冬の來るのを恐れる毎年の氣持ちを一層濃く感じた。今年は陽氣が狂つて、十一月に入つてもばかに暖かつたのが、誑かされてゐたやうに腹立たしいのである。

古い洋間の、最近ニスを塗り直した匂ひの强い扉の前に立つて、美須はちよつと衣紋を繕つてからノッブをまはした。

これも最近上蔽ひを新らしくした古い肘椅子に廉平は客と對ひあつて、喋つてゐたが、美須の顔を見ると、

「ああ、あんたを呼ばうと思つてベルを鳴らしたところだ」

と云つてから、客の方へ、

「もう三十年近く逢はんのぢやないかな。たしか私らが新婚旅行で京都へ行つた時、君も奥さんのお里へ來てゐて、御同列なのに逢つたよ」

「さうだつたかな。覺えてゐないけれど……」

客はゆつくり立上つて、美須の方を見た。血色のいい長面の中心に容貌を一層端正に見せる細長い鼻が、木蒐の嘴のやうにつき出て、形のいい薄手の脣との間隔を短くしてゐる。髪は廉平と同じぐらゐ鉛色になつてゐるけれども、艶よくうしろへかき上げてゐるので、咽喉もとのワインレッドのネクタイとよく調和してゐた。

「日向です……」

「まあ、ほんたうにお珍しい……」

美須は挨拶も忘れたやうに、日向の顔から眼をはなさず、

「ちつとも存じませんでした。事件のことでいらしつたお客さまだとばかり思つてゐまして」

「いや、どうも……」

日向は曖昧に笑つて、又ゆつくり椅子に腰を降ろした。

「奥さんはしかし、若いですなあ……豐中君とは親子みたいに見えますよ。この頃、生花の方で、景氣がいいさうですね」
「いえ、どういたしまして……」
美須は若いと云はれたのに氣をよくして、大形に顔の前で手を振つて見せた。
「親子はひどいよ。おれだつて君と同じ年ぢやないか」
「豐中はね、昔のお友達に逢ふと、あいつは腰が曲つたとか、頭が禿げたとか、他人さまのことを惡口言つて自分が一番若いやうなことを云ひますんですよ。いつか胃の手術をしてからお腹が縮んだみたいで、背中がだんだん龜の子みたいになつて來てますのに……」
「そんなことはない」
と言つて、廉平は腰かけたまま兩肩をうしろにそらせ、わざとらしく胸を張つてみせた。力んでゐるのが妙に子供つぽく滑稽に見える無理な姿勢だつたが、當人は日向と張り合ふやうに上向いてゐた。
「お忙しいんでせう、毎日……」
「いえ、うちのお稽古は週一度であと二日國際文化サークルへ外國人のかたに教へに行きますんですよ」
「さうですつてね、この間外務省の田口に逢つたら、あいつ疾うに役所をお拂ひ箱になつて、あの文化會館の主事になつてゐやがるんだよ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「ああ、さうか。うまいところにもぐり込んだな。あそこは停年がないからいいよ」
廉平の言葉には實感が籠つてゐた。
「君なんぞは學校へ行つて講義してりやあいいんだからいい御身分だよ。さうでない奴は皆困つてるぜ。われわれの年になると、職といふ奴がなかなかないんでね。たまにあると思ふと、小田原の少し手前まで出かけて、足代より悪い日當だなんて、口だからね」
「辻番は生きた親爺の捨てどころつて、川柳があつたね。この頃はせち辛くなつて辻番も尠くなつたんだらう」
「こんな世の中になると、お爺さんよりお婆さんの方がうるさがられながらも、遙かに有能なんですつてね……」
と美須が口を入れた。
「うちへ見えるお弟子さん達が云ひなさいますよ。共稼ぎ夫婦の場合なんかだつて、お母さんがうちに居てくれれば、何と云つても安心でせう。小さい子供を殘して働らきに出る奥さんなんかの身にすれば猶更ですよ。そりや勿論年齡層の違ひで摩擦はあるらしいですけど、その場合でも、昔ほど若い方が小さくなつてはゐませんからね。何しろかう女中さんが拂底ぢやあ、女の年寄はたしかに勞働力ですわ……當人とすればありがたいことぢやないでせうけれども、兎も角役に立つつてことは氣の張りになりますものね」
「ぢやあ、姥捨山ぢやなくつて、爺捨山の方が必要つてわけですね」

日向はゆつくり煙草の灰を皿に落して笑つた。

「しかしね、うちのおふくろなんてものは今まで生きてゐないでよかつたとしみじみ思ふよ。何しろ鞍ケ野の宮の御直孫といふ奴だらう。戰後になつたつて、お膳に袱紗をかけて眼八分に捧げて來なきや飯が食へないつて云ふんだから……いい工合に終戰の次の年お目出度くおなりになつたよ。榮養失調もあつたんだらうなあ」

日向は死んだ實母の話をしてゐても、普通の日本人がさういふ話をする時共通に示す、嚴肅げな表情を全く顏に泛べてゐなかつた。それは肉親の身の上を故意に冷たくつき放して話して自尊心の滿足を味ははうとする東京の市井人の酷薄げな表皮などとは全く性質の違つたもので、二三百年もの長い間、勤勞と隔絶した厚い帷の中に生きて來た貴族の持つ非情さであらうと廉平は思つた。

こいつはおれと同じ大學を同じ年に出てもう六十四五になつてゐる筈だ。おれが就職試驗にあくせくしてゐた時分、こいつはもう同族の美人令孃と結婚してヨーロッパ旅行などに出かけてゐたのだ。ゲーテの所謂、涙の味のするパンを食つたものでなければ天上の力を知ることは出來ないと云ふ言葉の見本のやうな奴だ。それでもこいつはこいつなりの人生を生きて來たことに間違ひはない……

四人もゐる娘と息子とは別居してゐるが、もう中學校へ行つてゐる孫もあるといふのに、今頃おれのところへ、離婚話の相談に來るとは何たることか。

いや、こいつは昔から金のある癖にひどい吝ん坊だから、おれのところへ相談に來たのも、友人なら謝禮も包み金ですむといふ胸算用があつてのことに違ひない……さうとすると、うつかり俠氣などは出せないぞ……

廉平がそんなことを考へてゐる間に美須は持前の蟲も殺さないやうな落ちついた調子で、死んだ鞍ケ野の宮家の姫君についての愁傷の言葉をのべ終つて、

「で、この頃奥さまはお元氣でいらつしやいますか。お子さん方ももう皆さんお立派におなりになりましたでせうね」

ときいてゐる……

日向は一向てれた顔もしないで、

「子供は皆大きくなりましてね、上の娘の孫はもう僕より背が高いんですからね」

などと云つてゐる。

一しきり世間話をしたあと、日向は手頸の腕時計に眼をやつて、

「ぢやあ、又出て來るからね……今の話のことよろしく賴むよ」

と云つて椅子から立上つた。

「ああ、調べては置く。君の方でも適當だと思ふデータがあつたら、見せてくれ給へ。それによつて善處するから……」

「うん、おれも實のところ家裁なんかへは行きたくないしね……君のところで話がつけばいい

と思つてゐるんだ」
玄關へ出るまでに二人はまだ何か話してゐたが固有名詞を一切ぬいてゐるので美須にはわからなかつた。
「又ちよいちよい連絡するから……奥さん、どうもお邪魔しました」
日向は紺のベレーを頭になじませながら、輕く頭を下げて歸つて行つた。
「隨分めづらしいお客さんね。事件を依頼に見えたんですか」
美須は紅茶器を重ねて、持つて、茶の間へかへりながら、夫にきいた。廉平はそれに生返事して、乾びた咳拂ひを二つ三つしてから、美須の手もとの茶器を見て、
「困つたもんだな、あのつんぼ……何べんベルを押しても出て來んぢやないか」
とぶつぶつ云つた。
「さうなのよ。餘り鳴るから普段着のまんまで飛出して行つたら、日向さんなんでせう。恥づかしかつたわ」
「あいつ、お前のことを若いつて云つてたな。おれと親子のやうだと……けしからん」
「それはお世辭だけど、日向さんこそひどく若返つて綺麗になつてたぢやありませんか。あの方忘れてゐるか知らないけど、ヨーロッパから歸つて來て間のない時分に私一度、三越であつたことあるのよ。その時つたら、顔は髭だらけだし、なりは襤褸だし、バロンどころぢやない西洋乞食みたいだつたわよ。まだ終戰前だから、今から思へば若い筈よね……それなのに、今

日は見違へてしまつたわ、ネクタイだつて半巾だつてぱりつとしてゐたぢやないの」
「うん、まあ……」
廉平は電氣炬燵に足を入れて、體を横に倒したまま、口の端を曖昧にむずつかせて、美須の方を見てゐる。
美須は陽溜りの既でに消えた縁に膝をついて、手入れの終つた小刀や鋏や劍山を木箱に藏つてゐた。
「あいつ、離婚のことで相談に來たんだ」
「へええ。」
美須は好奇心を煽られる話に出あつた時に取りあへず中年女の示す受け身の答へ方をしたが、花の道具を入れた箱を持つたまま、吸ひよせられるやうに、炬燵の前へ來て坐つた。
廉平の肘をついて横になつてゐる横には雜誌だのノートだの本だの新聞だのが、よくこれほど散らかせるものだと思ふほど亂雜に散亂してゐる。それを片づけようとすれば怒るし、美須自身も潔癖な質ではないので、一切夫の身の周りを構はない癖が、終戰後はわけてひどくなつてゐる。時々ヒステリー氣味になる時だけ、
「汚ない！　汚ない！　何て汚いんだらう、この家は！」
などと吐き出すやうに云ひながら、拍子をとるやうにばたばた本や書類を片づけて、帚やはたきに荒らい音を立て、庭へ埃を掃き出したりするが、それは甚だ間歇的な一時の昂奮であつ

て、毎日の生活では、廉平の傍からなるべく遠ざかるやうにしてゐるのが習慣になつた。一緒に食事をしたり、炬燵に當つたりしてゐる時も、話の合間に、芯の疲れてゐる癖にねばつこい勁さのひそんでゐる中年女特有の眼で、紙屑の中にうづまつてゐるやうな、廉平の顔へちらちら意地悪い視線を送るだけである。

ところが、日向の離婚といふ言葉が廉平の口から出た瞬間、美須の色の白い顔には、瞼の下の頰にいくらかたるみの見える二皮目の大きい瞳がまるで灯でも灯つたやうに生き生きと輝き出した。それは、唯でさへ、年より五つ七つは若く見える美須の顔に少女くさいあどけなさをさへ加へたほど、顯著な變化であつた。

「離婚つてあの奥さんとですか……」

「うん、勿論、奥さんと云へばあの女房よりありはしまい」

廉平は頤を撫でて云つた。いつも自分の話に無關心を裝ひ意識して面倒臭がるのが常の美須が好奇心にふくらんで問ひかけて來るのが面白く、じらしてやりたい氣分になつてゐた。美須も話を出し惜しんで相手を苛々させる廉平の癖は知つてゐるので自分の方もそ知らぬ顔でゐたいのだが、どうも離婚ばなしとなると冷靜ではゐられないのがこれも廉平と三十年來暮らしてゐる間に美須についた心癖である。まして日向の離婚といふのは若い夫婦の別れ話とは違つて、銀婚式も、疾うに越した筈の云はば自分達同然の老夫婦の間の出來事なので、美須にとつては近所から火事が出たほどの他人ごとにはすませぬ刺戟なのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com